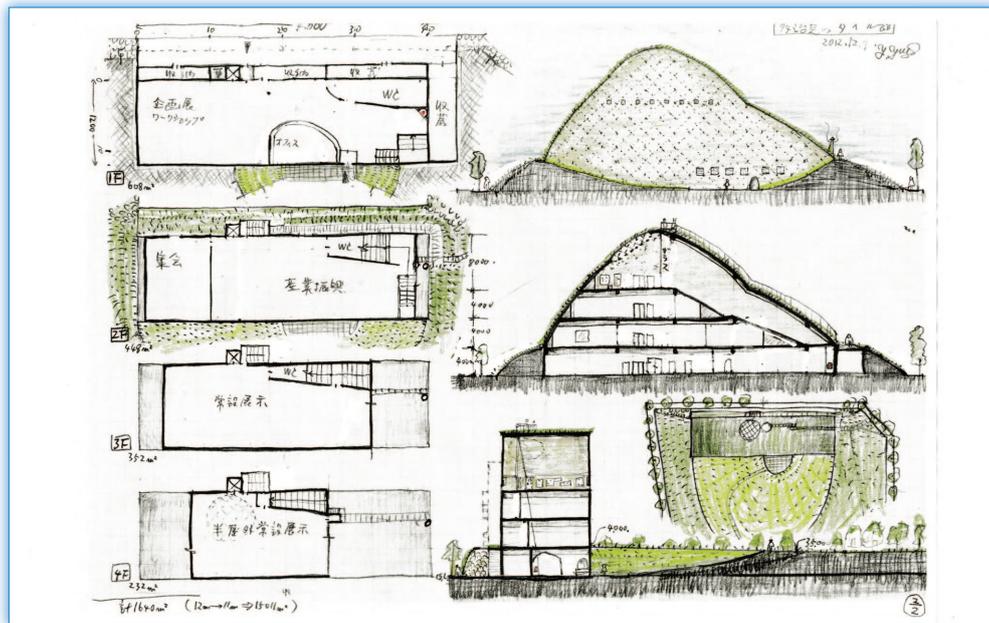


みの EDO

発行：多治見市美濃焼タイル振興協議会
TEL 0572-43-2141
発信：多治見市・笠原町東京情報局
TEL 03-5225-6863

◆特集◆

多治見市モザイクタイルミュージアム 平成 28 年開館に向けて建設概要を発表！



「多治見市モザイクタイルミュージアム」スケッチ（藤森照信氏）



「多治見市モザイクタイルミュージアム」のパース図



ロゴマーク

全国一のシェアを誇るモザイクタイルの生産地、多治見市笠原町に新たに建設が予定される「モザイクタイルミュージアム」の建設概要がさる5月27日に発表された。

名古屋市中区栄の国際デザインセンター・セミナールームにおいて行われた発表会では、建物の模型やパースが公表され、主催者の多治見市および関係者のあいさつに続いて、同館の基本設計を手がけた藤森照信氏が「建築デザインやコンセプトについて」概要を説明、さらにINAXライブミュージアム元館長の辻孝二郎氏から「モザイクタイルの歴史」について解説があった。その概要をお伝える。

〔記者発表会・式次第〕

主催者あいさつ	多治見市長 古川雅典氏
来賓あいさつ	多治見市議会議長 嶋内九一氏
来賓あいさつ	一般財団法人たじみ・笠原タイル館 代表理事 各務寛治氏
施設概要説明	多治見市経済部長 佐橋政信氏
講演	「モザイクタイルミュージアムの設計・デザインについて」 藤森照信氏（建築史家、建築家）
講演	「モザイクタイルの歴史」 辻孝二郎氏（多治見市モザイクタイルミュージアム企画・展示専門家）



多治見市・古川市長



嶋内市議会議長



たじみ・笠原タイル館・
各務代表理事



多治見市・佐橋 経済部長

モザイクタイルを世界に発信する――

最初に登壇した多治見市・古川市長は、多治見市笠原町に新施設「多治見市モザイクタイルミュージアム」を平成 28 年に開館すると発表。

多治見市笠原町は、モザイクタイルの全国一のシェアを誇る生産地であり、原料生産から加工、販売まで確立された分業体制の中で、デザイン性に優れたバリエーション豊かなモザイクタイルを生産してきた。そして 8 年前に笠原町が多治見市と合併する際の大きな約束は、笠原町の文化並びに産業を象徴する「モザイクタイル」を日本のみならず世界に発信してほしいということだった。このほどその悲願が結実し、業界の有志が収集・保存してきたタイル関連資料を収蔵品とするミュージアムの建設が、業界関係者の多くの熱い思いを受けて実現することになった、と説明した。

そしてこの施設が、役所が主導して建設する多くの施設と大きく異なる点は、地域の産業を支える多くの中堅・若手経営者が思いを結集して意見を集約し、モザイクタイルの文化・産業を発信する拠点として建設し、さらなる発展を図るとともに、観光の切り口からも管理運営にも責任をもつということに特徴がある、と強調した。

続いて嶋内市議会議長は、多治見市笠原町は美濃焼産地の一角をなすやきものの街で、戦後はタイル生産で栄え、国内随一のモザイクタイル産業の一大集積地となっている。近年は新しい技術を採用入れ、機能性の高いタイルやデザインのすぐれた魅力のあるタイルの開発に力を注いでおり、タイル需要が大きく落ち込む中で地元笠原町の長年の夢であるこのミュージアム建設は、タイル産業の低迷を打破する大きなインパクトをもっている、と述べた。

建設に至る歩みと施設の概要

かつての土岐郡笠原町でタイルの収集活動を始めようと雌伏 20 年、仲間とともに解体されようとするモザイクタイルを譲り受けて収集・保管してきたという、たじみ・笠原タイル館の各務代表理事は、当時は美術品でもないタイルを集めてどうするのか？とよく聞かれたが、

建設目的

地場産業である美濃焼タイルを題材とした拠点施設を整備することで、笠原地域への交流圏拡大と、これに伴うまちづくりや地域活性化に寄与し、「タイル産業振興」「観光振興」をはかる。

概要

- ・建設場所 : 多治見市笠原町 2082 番地
- ・敷地面積 : 3,558.85㎡
- ・建築面積 : 774.58㎡
- ・延床面積 : 1,919.65㎡
- ・建築物高さ : 19.419 m
- ・建物用途 : 博物館
- ・構造規模 : 鉄筋コンクリート造 (地上 4 階)
- ・付帯施設 : タイル広場 (約 2,800㎡)
- ・その他 : 笠原庁舎の解体 (鉄筋コンクリート造 4 階建)
- ・駐車台数 : 19 台 (一般車 10 台、身障者 3 台、公用 3 台、サービス 3 台)

設計者

藤森、エイ・ケイ、エース設計共同体

それにめげずに人力で手間暇をかけて集めた結果、それこそが実は戦後の笠原のモザイクタイルの歴史であった、とこれまでの歩みを振り返った。

収集というものは、たくさん集めると価値になる。それが結実してモザイクタイルミュージアムの建設に繋がった。この収集したコレクションをいずれミュージアムで見えただき、昭和 30 年代に全国に広がったモザイクタイル (浴室・台所・トイレ・水回り・内外装…) を記憶の底から思い起して、もう一度現実の世界に取り戻していただきたい。そこから新しい時代をリードするようなモザイクタイルを発見する場にしていきたい。それが笠原町民として、モザイクタイル産業を担ったものとしての誇りである、と熱い胸の内を披露した。

最後に多治見市・佐橋経済部長は、これまで「仮称・日本タイル館」と称してきたが、「多治見市モザイクタイルミュージアム」と名称が決定しロゴマークも決まったとして、施設の概要を説明した (別掲参照。建設場所は笠原町の中心地・市役所笠原庁舎跡地)。

内部構成は、1 階がエントランスホール、2～3 階が企画展示室で「タイルの昨日・今日・明日」をテーマにした展示を行なう。建物の外装は土壁風の外壁にモザイクを埋め込み、屋根にはルーフトイル、外構計画はできるだけ緑の植栽を配する。この 8 月にも工事に着手、来年 1 月頃に笠原庁舎の解体、4 月より本体工事、平成 28 年 6 月に開館予定となっている、と工程を公表した。

「モザイクタイルミュージアムの 設計・デザインについて」【要旨】

藤森照信氏（建築史家、建築家）



藤森照信氏

ももこと土の盛り上がった建物!?

モザイクタイルの博物館を建てたいとの依頼を受け何度も現地に行ったが、始めはどうしようかと悩んだ。笠原のモザイクタイルを外装に張って、中には地元の皆さんが長年かけて収集してきた笠原のモザイクタイルを展示するというだけでは、おそらく誰も感動しないだろう。集められたタイルは今ももうないし、若い建築家からすればこんなことにもタイルを使っていたのかという驚きがある。それは今となってはみるからおもしろいので、年月を経た結果、出てくる価値というものがある。

そういう歴史的な価値を目玉にしてどのように見せるかを考えていた時に、土取り場を見せていただき、それがとてもおもしろい光景に思えて、それを外観にしよう

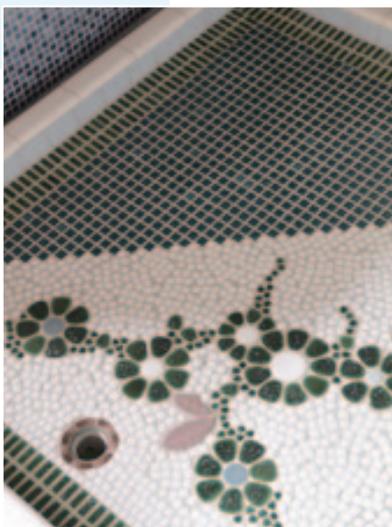
と着想がわき、この不思議な博物館の形が生れた。ももこと土が盛り上がったような形は、ありそうでないちょっと珍しい設計だと思う。その土の盛り上がったような外壁に割ったタイルを埋め込んでいく。遠くから見ると土の中に何か輝くものがあり、寄って見るとタイルがある。突然、町の中に土取り場が現れて、そこに実はタイルが混じっている。そういう作りになっている。

天空から自然光が降り注ぐ…

内部構成は、すり鉢状のような1階がエントランスホール、2階は産業振興、3階は歴史（収蔵品展示）、4階は浪漫館資料の企画展示となっているが、それを繋ぐ階段を吹き抜けのような構造にして北側につくり、1



「多治見市モザイクタイルミュージアム」模型



モザイクタイルの洗い場
(モザイク浪漫館所蔵)



モザイクタイルと貼り板
(モザイク浪漫館所蔵)



モザイクタイルの浴槽
(モザイク浪漫館所蔵)



モザイクタイルのカマド（モザイク浪漫館所蔵）



モザイクタイル（モザイク浪漫館所蔵）



モザイク浪漫館内部

階から長い階段を4階までずーっと土で覆われた穴の中を昇ってゆくような形にした。4階にトップライトをつくり天から外光が差し込んでくるような仕掛けによって、光に導かれて階段を昇って行くような印象を受けるだろう。

3階の歴史展示室は白系のタイルで床から壁まで張りめぐらし、そこでこれまでのタイルコレクションを見せる。4階屋根の開口部から実験的にタイルのカーテンを下げてみよう、いろいろと試作した結果、たくさん吊り下げたワイヤーにモザイクタイルをボンドでくっつけると簾のようにできることがわかった。土の穴倉の階段をトップライトに誘導されて昇っていくとタイルのカーテンの間から空が見える。劇的な体験ができると思う。

タイルを世界に発信する場として

タイルは土からできる。それが他の工業製品とは違う

やきもの独特の豊かな表情をもたらす。その土から生まれたタイルという物語が感じられる、設計デザインに工夫を凝らした。かつて建築家・隈研吾氏が、私の設計した建物を「見たこともないのに懐かしい」と言われた。この建物もこれまで見たことのない不思議な形だが、どこか人の心を和ませるようだ。この建物の形をミュージアムのロゴマークとした。一度見たら忘れないだろう。

現在の駐車場には、内外装にりっぱなタイルを使った公共トイレがある。壊すのは忍びないので、このトイレは残して外装タイルの上に市民のみなさんと一緒にモザイクタイルを張ろうと、楽しみにしている。いずれこのミュージアムが、訪れる皆さんにタイルの歴史を知ってもらい、また新しいタイルの世界を感じてもらえる場になれば嬉しい。

「モザイクタイルの歴史」【要旨】

辻 孝二郎氏

(多治見市モザイクタイルミュージアム企画・展示専門員)



辻 孝二郎氏

モザイクの発祥と隆盛

INAX ライブミュージアム（愛知県常滑市）で館長を務めたが、このコレクションの基となったタイルコレクターであった故・山本正之さんの言葉「モザイクには美の女神の意味がある」が忘れられない。モザイク(MOSAIC)の語源は、ラテン語のMUSA(芸術の女神)で、これは英語のMUSEにあたる。モザイクそのものはギリシャ語でMOUTAIKOS、ラテン語でMOUSAICUS、イタリア語でMOSAICOと称される。

モザイク(大理石などの小片)の発祥は紀元前の古代ギリシャにさかのぼる。それが古代ローマや紀元5世紀以降のビザンチンで隆盛を迎え、10世紀頃からイスラムのモスクなどで焼成タイルによるカットワークモザイクが盛んになり、モザイク文化が花開く。現在のモザイクタイルの源流は19世紀のイギリスで作られた小片の

ビクトリアンタイルで、日本では1907年にドイツのモザイクタイルを参考にして、国産化が始まったとされる。

最古の事例としては、エジプト・ジェセル王のピラミッド(BC27世紀)の地下通廊に張られた青いモザイク(タイル形状)がある。さらに古い例として、クレイペグと呼ばれる焼き物の小片が壁に差し込まれた装飾がメソポタミア(BC30~35)のウルの遺跡で発見されるが、その後、それらを継承された例が見られない。[図版1]

「美の女神たち」とともに——

美濃地域におけるモザイクタイルの創業と変遷について、『炎と土の綾なす装い 美濃焼タイルのあゆみ』(和木康光著)によると次のように整理される。

①大正15年(1926)東濃地域における最初の無釉モザイクタイル製造

モザイク(Mosaic)の種類と歴史概要

最古の事例としてはジェセル王のピラミッド(BC27世紀)の地下の通廊に張られた青いモザイク(タイル形状)があり、モザイクやタイルのはじまりとすることが多い。

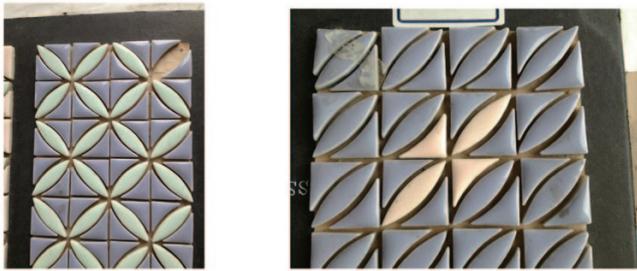
やきものの小片が壁を飾った始まりとはいえ、このモザイクの形状や技術などが継続・継承されたことがなく、現代への影響は少ない。



参考:メソポタミア BC30世紀~35世紀

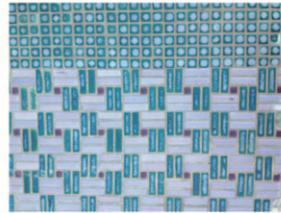
INAXライブミュージアム 世界のタイル博物館

図版1



左右のタイルは同じ形のものを使用。配列と色を変えることで、表情が劇的に異なる。

図版 2



(輸出に使われたであろう) 日本的な色合いと表現
左は着物の色合いが参考になっているとも言われる。

図版 3



石やガラスでは表現できない窯変のモザイクタイル。
やきものらしさを表現。

図版 4



日本の住宅に色彩を持ち込んだモザイクタイル
の事例

図版 5

②山内逸三が昭和 5 年に施釉モザイクを試作、昭和 10 年に施釉モザイクの生産確立

③戦後、輸出モザイクタイルの急増、昭和 40 年には生産の約 60% が輸出。日本の住宅（水回り）にモザイクが色彩を持ち込む

④カネキ製陶所が外装モザイクタイル（45 角・45 二丁）を本格販売

こうした変遷を経て、現代では低迷するタイルの需要をどのように拡大するかが大きな課題となっているが、そこにこそモザイクタイルミュージアムの役割が期待される。歴史に学び、新しい時代を切り拓くためという意味では、現在、モザイク浪漫館に収蔵されているモザイクタイルにヒントを探ることもできるだろう。

例えば、同じ形のタイルでも配列と色を変えるだけで表情が劇的に変化する。日本的な和の色合いを参考にする。窯変によるやきものらしさを表現する。日本の住宅に色彩を持ち込んだモザイクに学ぶ。[図版 2、3、4、5] こうしたモザイクタイルは、歴史展示としてミュージアムの一つの柱になるだろう。

モザイクタイルの未来を語るには、現在、笠原地区の女性ボランティアグループがゴミ集積場の回りをモザイク画で美しく彩っていることは意義深い。「美の女神たち」がここでも素晴らしい活動を展開している。モザイクミュージアムでもこうした活動とも連携し、地域の人に活力を与え、この時代を突破する力を結集していきたい。

◆特集◆

国際陶磁器フェスティバル美濃 '14

第10回 国際陶磁器展美濃 2014.9.12 Fri - 10.19 Sun

陶磁器デザイン部門



■グランプリ
KOCHIKU / 吉村 敏治 (京都府京都市)

国際陶磁器フェスティバル美濃は、陶磁器のデザイン・文化の国際的な交流を通じて、更なる陶磁器産業の発展と文化の高揚を目的として「土と炎の国際交流」をテーマに1986年に第1回を開催して以降、3年に1度開催されるトリエンナーレとして継続的に開催し、2014年の開催で記念すべき第10回を迎える。

メインイベントである「国際陶磁器展美濃」は、国際的にも認知された世界最大級の国際陶磁器コンペティションとして、入賞・入選作品がメイン会場であるセラミックパークMINOに一堂に展示される。その他、地

元陶磁器業界及び多治見市・瑞浪市・土岐市の美濃陶産地に密着した事業が多数企画されており、多くの来場者が美濃の風土や歴史、魅力を楽しみ、地域全体の発展につながることを期待される。

今年は9月12日(金)～10月19日(日)まで、セラミックパークMINO(岐阜県多治見市)をメイン会場に開催の予定。ここでは「第10回 国際陶磁器展美濃」主催者(国際陶磁器フェスティバル美濃実行委員会)のご協力をいただき、展覧会開催にさきがけ入賞作品からグランプリ作品をお贈りする。



■ グランプリ
彩土器 / 五味 謙二 (岐阜県土岐市)

【陶磁器デザイン部門】

● グランプリ

石のような自然な表情を持つ塊でありながら、幾何学的な楕円筒の形をしている。粗野は自然感覚なのにその厚みは大変薄くてシャープである。芸術性を面に表現しなから実は繊細な構造と使い方への配慮が素晴らしい。デザインを逸脱せず、陶芸の魅力をふんだんに表現している。

[講評；審査委員長 黒川雅之 (建築家・デザイナー)]

【陶芸部門】

● グランプリ

大賞作品はそれにふさわしい存在感に満ちている。土でしか表現できない形と2色でいいねいに質感をととのえた表面のおもしろ味があいまってすぐれた作品になっている。上下にわかれた作品は、上の重みを下部がしっかりと受けとめているような安定感を感じさせ、現代的な土器という独自の世界をつくりあげている。

[講評；審査委員長 榎本 徹 (岐阜県現代陶芸美術館長)]

第10回 国際陶磁器展美濃

フェスティバルのメイン催事「国際陶磁器展美濃」は、陶磁器のデザイン・文化の国際的な交流を通じて、陶磁器産業の発展と文化の高揚に寄与することを目的に開催される国際的なコンペティション。斬新な提案や陶磁器の未来を切り開く作品が、国内はもちろん世界中から集まる。

作品募集は、「陶磁器デザイン部門」と「陶芸部門」の2部門で行なわれ、今回は過去最大となる60の国と地域から2579点にのぼる作品が応募された。

これらの作品について国内外の著名な審査員により、2月から3月にかけて第一次審査、4月に第二次審査が行なわれ、通過した236点の最終審査会が7月18日・19日にセラミックパークMINOにて現物作品により実

施された。その結果、グランプリと各部門(金・銀・銅)各賞、審査委員特別賞等が決定し、7月20日には審査結果の発表と審査員によるシンポジウムが開催された。

入賞作品及び入選作品(陶芸部門158点/陶芸デザイン部門57点)は、フェスティバルの会期中(9/12～10/19)にセラミックパークMINO 展示ホールにて展示される。

■ 国際陶磁器フェスティバル美濃'14

主 催：国際陶磁器フェスティバル美濃実行委員会
会期及び開催期間：2014年9月12日(金)～10月19日(日)【38日間】
会 場：多治見市・土岐市・瑞浪市 / メイン会場：セラミックパークMINO (岐阜県多治見市東町4丁目2-5 TEL 0572-28-3200)

ホームページ <http://www.icfmino.com/>